手紙を書こう

LI校　中等部一年一組

畑崎　悠太

日本の祖母は誕生日に必ず手紙をくれる。誕生日その日に着くことはないけれど、誕生日の前後にメールボックスを開けて、白くて縦に長い日本の封筒を見つけると嬉しくなる。祖母の流れる様なきれいな字、読めない字もあるけれど、祖母の声が聞こえてきそうだ。

デジタル時代の今、メールやメッセージは何時でもどこでもリアルタイムで送れるし受け取る事が出来てとても便利だ。漢字も変換しスペルミスも直してくれる。文章も候補をあげてくれる。でも便利な反面、相手の返事が遅かったり、既読がついているのに何の反応もなかったりすると不安になる。タブレットやスマートフォンを使いこなしているつもりだが、すっかり振り回されている。

七月の末から二週間、キャッツキルの田舎にスリープオーバーキャンプに参加した。もちろん携帯電話は使用禁止だ。携帯電話やタブレット、ゲームのない二週間、無ければ無いで他に楽しむ事を見つけられることに気付いた。キャンプの二週目に、他のグループの人とコミュニケーションを取る方法が発表された。それはラブボックスと呼ばれている郵便ボックスで、あまり交流のない他のグループの人に手紙を送ることが出来る。他のグループの友達に伝えたいことがある時、誰か気になる人がいる時、手紙を書いてこのラブボックスに入れると、その人に届けてくれる。

メールやテキストと違い、手書きで手紙を書く時は、相手のことを考え、削除キーひとつで消せない文章は一つ一つ言葉を選び心を入れる。電話での会話は、言葉は残らないのでその時の思いつきで話しているが、手紙は捨てない限り後まで残るので、言葉を選び気持ちもこもる。

手紙の手書きの字は、その人のその時の気持ちも表す。紙には書いた場所の匂いがあり、封筒には運ばれるまでの苦労の跡が残る。お金も時間もかかり便利さはないが、温もりがある。

自分の字は自慢にもきれいじゃないし、スペルや漢字や文章の作成も自信がない。でも特別な人、特別な日には手紙を書こう。自分の心が伝わる様に。

ぼくのランドセル

LI校　中等部一年一組

ベンソン　明斗

夏休みのある日、お母さんが部屋を片付けるように僕に言った。散らかった僕の部屋には、ランドセルが一個転がっていた。何だかなつかしい気持ちになってランドセルを開けてみると、五年生の教科書とノートそして担任の新先生からもらった「今週の宿題」のプリントが入っていた。日付は三月七日だった。僕のランドセルはこの日から時間が止まっていた。

プリントの一番下に、先生からのメッセージがあった。『来週で五年生が終わります。今のクラスともあと一回。少しなごりおしいですね。来週は卒業生を送る会が行われます。「さようなら」の歌を練習しておきましょう。』って書いていたのに、その翌週、補習校は突然新型コロナでなくなり、六年生を送る会も、さようならの歌も歌うこともなかった。

その後、担任の新先生と会うこともなかった。今思えば残念な五年生の終わりだった。　六年生は一度も補習校に通わず、バーチャルクラスだったので、僕のランドセルは一年間使われることなく、僕は小学校を卒業した。

　そんな僕のランドセルには日本での思い出がいっぱい詰まっている。ただでさえ重たいランドセルに給食袋やら上靴を横にひっかけてさらに重くなったランドセルをしょって、毎日学校までふらふらになりながら歩いたのを覚えている。それでも大切なランドセルを汚したくなかったから、星のがらのビニールのランドセルカバーをつけて使っていたから、今でもランドセルは傷ひとつないぴかぴかのままだ。

　僕のランドセルのポケットには何個か宝物が入っている。二年生の時、担任だった酒井先生が忘れ物の多い僕のために色画用紙で作ってくれた、「おまもり」だ。僕は毎日持っていかないといけなかったタオルと名札をいつも忘れていたので、酒井先生が「おまもり」と書いてくれていた。他にもぼくが八歳になった日、クラスメイトのけいとくんがくれた手作りのバースデーカード。ポップアップ式になっていて、カードを開けるとイチゴのショートケーキが飛び出て「８」と書かれたキャンドルが上にささっている。あと、一番の宝物は、一年生の時、登山学習で学校の裏にある、鉾立山（ほこたてやま）という山に登った時、頂上で拾った石だ。標高六百メートル以上ある鉾立山登山は一年生にとってとてもきつかったけど、担任の庄山先生が怖かったので止まったらおこられると思って死にそうになりながら頂上まで登ったのを覚えている。その時、頂上のサインの前に落ちていたこの石を記念に拾ってリュックサックに入れて持って帰り、それからランドセルに大切に入れていた。

　このように、僕のランドセルはたくさんの思い出と宝物がつまっている。六年間きっちり使えなかったのは残念だけど、僕はこのランドセルは絶対に捨てない。いつか自分の子どもに僕の宝物を見せて、思い出話を聞かせてあげたいと思っている。それまでずっと大切にしまっておくつもりだ。

変化

L1校　初等部六年一組

市川　茉莉

　私は十二歳で、今まで髪がとても長かったです。特に前髪は顔が見えないぐらい長くて、後ろ髪が背中までありました。私はたくさんスポーツをするので、いつも動きまわっている時、髪がすごく邪魔で、好きではなかったです。髪を止めることも嫌で、二〇二〇年の始まりのころ何がいいのかわからなく、髪の状態が不安定でした。そしてコロナが始まり、人と会うことがなくなりました。私はそこで、髪の見た目のことを気にしないで良いので、二〇二〇年六月に、前髪の先を脱色しました。二〇二〇年の終わりのごろまで脱色した髪が三センチぐらい残っていて、前髪は鼻ぐらいまでありました。二〇二〇年の五月から十二月まで髪が変化したことに、何となく納得していました。けれどその間は後ろ髪のことは気にしないで、放っておいたらもっと長くな

ってしまいました。二〇二一年の一月に髪は元通りになって、髪をまた気にするようになりました。

「どうしてこんなに髪型が好きじゃないの」と考えたら、後ろ髪の問題だと分かり、髪全体を短く切ることにしました。

私の誕生日、四月の真ん中ごろ、マンハッタンで髪を切りました。最初に美容師に髪型を伝えて、三十センチ後ろ髪を切ることにしました。髪を六個に分けて、一つずつ切っていきました。私はとても嬉しくて、緊張していて、体が震えていました。切った髪が鏡の前に置いてあって、十二年もあった髪が一瞬で切られて魚みたいに並べてあったのがとても不思議で、変な気持ちでした。並んでいた髪を見ている間に、頭と肩が軽くなり、首に空気がスーッと通り、鏡を見ると違う人が映っているみたいでした。顔と首がはっきり見えて、これからの私はこの人だと自分で認めました。そのあと、髪をシャンプーして、美容師が私の希望の髪形に切り始めました。時間はとても早く感じて、その間切った後のことを考えていました。友達や知っている人のリアクション、髪をどうやって面白くするか、学校に戻ったら前のクラスメートに何を言われるかとか考えていました。一番心配していたのは、男の子に間違えられることです。

九月になって現地校が始まって、誰かに会う時、いつも男の子だと間違えられるけど、もう慣れていつも女の子です、と答えます。クラスのみんなが私は男の子だとまだ思っています。私の友達はみんな女の子たちで、私の声も女の子の声なのに、見た目で男の子だと判断するのです。また、学校で知らない人にいつも「君の髪かっこういいね。」や「私は君の髪が好きだよ」とか言われます。クラスが違って、会ってない人でも、私のことを知っているようです。名前を知らない人は私のことを「男の子に見える女の子」と呼びます。二年前、私はみんなから隠れていて、普通の子でした。でも今は私の学年の中で目立ってる人です。今の私はほかの人が思うことはそんなに気にしません。学校で会う人や、知らない人の思うことなんか私には関係ない、と思うようになりました。

今の私と二年前の私を比べるとすごく違いがあって自分でびっくりします。今の私はもっと自由で、自分がしたいことができてとてもうれしいです。私は四月に髪を切ることを決めて切ってから、もっと勇気をもって、知らない人に何かを聞くことや、何かに意見を言えることができるようになりました。

ある日、通学バスの中で六年生の子供たちが、叫んだり、立ったりして、みんなは迷惑だと感じていました。でも他の人は何も言わず黙っていました。そこで私は席から立ち、みんなの迷惑でうるさいと怒鳴りました。そのあと、六年生の子供たちはちゃんと座り、もうちょっと静かにしゃべっていました。二年前の私は絶対こんなことができなかったです。怖くて何も言えなくなり、後で後悔したと思います。

新しいことをするのは怖くて、面倒くさいことだけどそれに慣れて、自分がそれによって嬉しくなれる方法を見つければ、私みたいに前よりももっと嬉しい結果がでると思います。だからみんなも自分の人生で新しいことをやってほしいのです。小さいことでも、すごく影響があるものでも、なんでも新しいものに対して実験してほしいのです。今の状態から変わりたいなら、何もしないことが一番悪いのです。レースに勝つには、最初は走ることが怖くても、走る練習を新しく始めなければいけません。私は四月に髪を切ることで走る練習をしました。そして今、とうとうレースに勝てた気持ちです。レースに勝つことは、何かを変化させ、自分らしく幸せになれることです。

イエローストーン国立公園

ニューヨーク補習授業校　工校

六年一組　荒木　晴香子

私は、夏休みにイエローストーン国立公園に行きました。初めてキャンプカーでパークをまわり、移動しながらお昼寝したり、遊んだりできるのが新鮮でした。

初日はまず、キャンプカーをクルーズ・アメリカで借りて、スーパーに一週間分の食材を買いに行きました。スーパーにはいろんな物があってこうふんしました。次の日は父の誕生日でしたが、キャンプカーのサイドミラーが割れるという事件がありました。パーク内を守っているパークレンジャーの人たちがやさしく助けてくれたので、無事にキャンプサイトについてお祝いできました。私はキャンプカーの中でドキドキしてましたが、ふつうに車が走りだした時にとても安心しました。その日はグランド・ビレッジという場所に泊まりました。そこで食べたスモアがとっても

思いました。私たちは「あれはオールドフェイスフルじゃなくてオールド・クルーレスだったねー」なんてふざけて話して、笑ったことが良い思い出です。

私はイエローストーンに行って、次の二つのことを知りました。一つは自然はやっぱり私たちにとって、心地良く素晴らしいものだと思いました。イエローストーンはニューヨークも比べても空気がおいしくて、いつも目に入る山々に癒されました。二つ目は、家で自由に好きなだけお水やトイレを使えることがこんなに幸せなんだな、と気づきました。キャンプカーで生活しているも、いつもお水を節約しないといけないのでおふろの時間が短くなったり、水が急に冷たくなったりするので大変でした。それはそれで楽しかったけれど、家に帰るも「長くおふろに入れるなんて幸せ！」なんて言いながら家のおふろに入りました。

イエローストーン国立公園、いろんな経験

おいしかったです。

三日目は観光をしました。まず、おみやげ屋さんに行って、チャームと宝石を買ってきました。私はおみやげが大好きなんです。イエローストーンはいろんな自然が残してあり、温泉がボコボコと出ているマッドポットや、虹色の湖、時々見かける動物たちが印象的でした。私はワイオミングの昔の人になったような気分でハイキングに行きました。

その中でもおもしろかったのがオールド・フェイスフルでした。イエローストーンで一番有名なスポットです。決まった時刻に水が噴き出す、とっても不思議なゲイザーです。私たちが行った時はもう噴き出す時刻でしたが、まだ水は噴き出てきません。ちょっと水が出てきたけれど、まだ写真で見たような光景とは違います。「もう噴き出さないんじゃない？」と思っていたらとつぜん水が高く上がりました。私は時間はずれていても、あんなに高く水を上げられる自然はすごいな、と

が出来て本当に、本当に楽しかったです。楽し過ぎて帰る時には泣いてしまいました。これからのことを教えてもらってイエローストーンには感謝しています。ありがとう、イエローストーン。

①

波に乗る時

L工校初等部四年二組

スハフスマ　正助

昨年コロナで日本に行けなかったので、家族で近くの海に行ってサーフィン・ブギーボードを始めました。

最初は今までやった事がなかったし、いつも海に行くと砂遊びか水で少し遊ぶだけだったので、どんなに波乗りが楽しいかわかりませんでした。

ぼく達がいつも行くロッカウェイビーチはサーフィンをする場所で、サーフボードかブギーボードを持っていないと海に入ってはいけません。はじめた時は波も高くて、止まらなくや、て来る波がこわかったです。波にのまれておぼれそうになったり、海の中でおしっこをしたり、その水が鼻に入ったりして気持ちが悪くなったりします。でも、そう言う時はいたいけど、もっと上手になりたいと思います。

波を選ぶ時に一番大切な事は、波の速さと波の形で選びます。海の中にいると、どの波に乗れば良いかわからなかったけど、何回もやっているうちに、どの波に乗るかがわかってくる様になりました。波に乗れた時は、イェーイ!!とすごくうれしくて笑ってしまいます。なぜ笑うかと言うと、今までにそんな気持ちになった事がない感じで、自然に笑ってしまうからです。

今はブギーボードで波に乗る練習をしていますが、今度はお兄ちゃん達がやっているサーフボードで波に乗れる様にしたいです。これからたくさん練習をして、大きくなったら車を買ってサーフボードを持って一人で何回も海に行きたいです。

②

初めてのおこづかい

L工校初等部四年二組

西阪　理奈

わたしの友達は何か家でお手伝いをするとおこづかいがもらえると聞きました。そのお金で新しいおもちゃや、ほしいものを買ってもいいそうです。残ったお金は貯金箱に入れて貯めているそうです。わたしは、それを聞いていいアイディアだなと思いました。わたしもお母さんとお父さんに、何かしたらおこづかいがもらえないかと聞いてみました。

お母さんとお父さんは、はじめはあんまり乗り気ではなかったけど、テストとして二回ぐらいなら試して

みてもいいと言ってくれました。わたしはそれを聞いて、飛び上がってよろこびました。最初にやったお手伝いは、四才の弟の健をお母さんが仕事をしている間、三時間めんどうをみることと、弟の宿題を手伝うことでした。お母さんが仕事をしている間、健に牛乳をコップに入れてあげたり、おやつを出してあげました。それからトイレに連れて行ってあげたり、おもちゃで遊んだりしました。弟のくもんの宿題は、とってもかんたんなので、弟と遊びながらやったらすぐ終わりました。お母さんがいなくても健は泣かなかったので、お母さんもすごく助かったとよろこんでくれました。このお手伝いでわたしは五ドルもらいました。すぐにそのお金は貯金箱に入れました。

次にやったお手伝いは、三十六本の鉛筆を現地校に持って行くために、えん筆けずりで全部けずることでした。たぶん十分くらいで終わったと思います。終わったらゴムで結んで、自分のかばんに入れました。それから学校に持って行くいろいろな文ぼう具に自分の名前とクラスを入れたりしました。たくさんあったので書くのが大変でした。最後にお父さんが、けずったえん筆と文ぼう具に書いた私の名前とクラスをチェックして、全部よくできたので、三ドルもらえました。このお手伝いでわたしはそれを聞いて、飛び上がってよろこびました。最初にやったお手伝いは、四才の弟の健をお母さんが仕事をしている間、三時間めんどうをみることと、弟の宿題を手伝うことでした。お母さんが仕事をしている間、健に牛乳をコップに入れてあげたり、おやつを出してあげました。それからトイレに連れて行ってあげたり、おもちゃで遊んだりしました。弟のくもんの宿題は、とってもかんたんなので、弟と遊びながらやったらすぐ終わりました。お母さんがいなくても健は泣かなかったので、お母さんもすごく助かったとよろこんでくれました。そのお金もすぐに貯金箱に入れました。

わたしは、お手伝いをしてお金がもらえるのが楽しくなりました。もっとやりたいからこれからもお手伝いをやらせてほしいとお母さんとお父さんに言いました。お母さんが、「ちゃんとこれからもできるならやってもいいよ。」と言ってくれたのでうれしかったです。それからお母さんと一緒に「おこづかい帳」を作りました。この「おこづかい帳」にもらったお金と使ったお金を書いて、自分がいくらお金を持っているかすぐ分かるようにしました。今はまだお金があまりないけど、これからどんどんお手伝いをして、たくさんお金を貯めたいです。

1

じゅう道ライオン

LI校三年二組

片平 咲

ぼくは、五さいのときから、じゅう道をならっています。週に三回、道じょうに行きますが、去年はほとんどオンラインじゅぎょうでした。でも、ついにこの夏、初めての昇きゅうしけんと、しあい出じょうをけいけんすることができました。

12×12



っひみつの花ぞの、も読んでL工校初等部三年一組

アーノルド・ローソン 安澄

この本の主人公はメリーという女の子です。メリーはおまやかされて育ったのでわがままでいじわるでした。でもお父さんとお母さんが死んでしまって、メリーはおじさんの家で生活することになりました。するとメリーは自分でしないといけなくなりました。そんなとき、庭に、ひみつのとびらをみつけて、そのむこうに、かくれたきれいにされてない庭を見つけて、お友達とお花をたくさんうえました。メリーはとてもやさしくて、

18×18

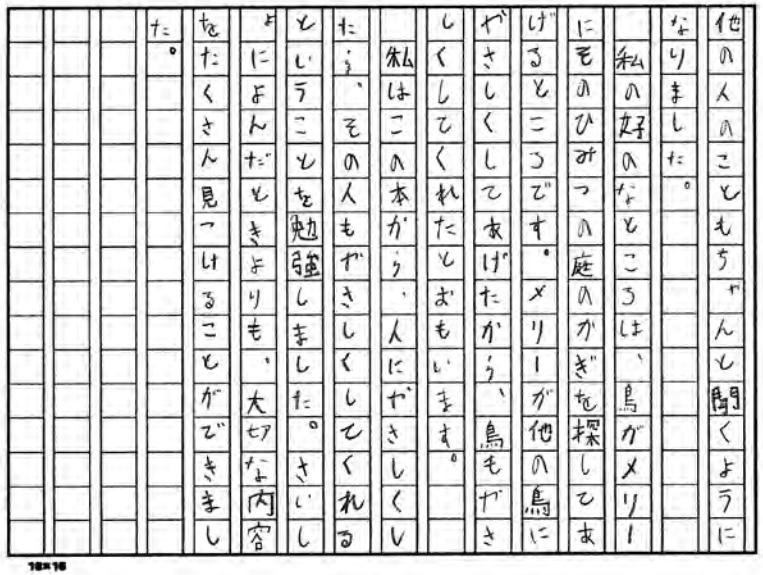
2

た。

昇きゅうしけんは、七月十二日に道じょうでした。大外刈やせおいなげなど、四つのわざのテストがありました。ぼくは合かくして、黄おびになりました。

しあいは、七月八日にニュージャージーでありました。さい初のたいせんあいては、なんと全国チャンピオンでした。まけてしま

12×12



他の人のこともちゃんと聞くようになりました。

私の好のなところは、鳥がメリーにものひみつの庭のかぎを探してあけるところです。メリーが他の鳥にやさしくしてあげたから、鳥もやさしくしてくれたとおもいます。

私はこの本が、人にやさしくしたら、その人もやさしくしてくれるということを勉強しました。さいしょによんだときよりも、大切な内容をたくさん見つけることができました。

18×18

1

「じてん車とわけが」

校　しょ　とうぶ　二年二組

福田　昭優

今、私のひざには、大きな赤いまるが二つあります。ひじには、ニューヨークのちずみたいな形があります。ひざの上のまるは、ターゲットのお店のマークみたいに、ニじゅうまるになってまだ赤いです。下の方のまるは、ひざの色に近くなったけど、

12×12

2

まだはい色です。ひじのちずのような形は、だいぶきえてきました。

どうしてこんな形が、私のあしやうでにあるかと言うと、私はじてん車にのるれんしゅうをして、ころんだからです。きょ年の夏に、友だちがじてん車にのっているしゃしんをおくってきて、私はとてもうらやましい気もちになりました。

12×12

3

いましたが、ぼくはた分間ねばることができました。つぎのたいせんあり手には、かつことができました。先生や先ぱいたちが、沢山おうえんしてくれて、銀メダルをもらうことができました。

「栄、ライオンみたいだったね。」と、先ぱいに言われました。力はつかいきってしたけど、ぼくの心はま

12×12

4

だ、たたかいたい気もちでした。

ぼくはもっとつよくなりたいです。黒おびにもなりたいし、全国チャンピオンにもかちたいです。そして、いつかじゅう道の先生に、なりたいです。

12×12

3

夏休みのある日、お姉さんといっしょに、じてん車にのるれんしゅうをしました。お姉さんは、うんどうがとくいです。

「もう少しれんしゅうすれば、じょうずにのれるようになるよ。」

と、おうえんしてくれました。何ども足をコンクリートの上につきながら、だんだん長くのれるようになり

12×12

4

ました。

「やった、すごいよ。」

とお姉さんが言ったとき、とまり方をよく知らない私は、下りざかでころんでしまいました。ちがたくさん出て、休中がいたくて、なきました。ひじは大きくすりむけて、ひざはふかく切れました。

家に帰って、シャワーできずをよくあらって、お姉

12×12

5

さんがしょうどくし、そして見たことともない大きいばんそうこうを、はってくれました。外出していたお母さんがもどってきて、ばんそうこうの上に「早くなおりますように」と書いてくれました。

今はまだじてん車にのる気になれないけど、きずがなおったら、今どはとまり方をれんしゅうします。

12×12

とりのすばこ

L工こうーねんーくみ

川上かつや

ぼくは、おねえちゃんととりのすをつくりました。さいしょに、きのはこをにわのデッキにもってきました。そして、はこのなかにくさとはっぱをつみかさねました。

「えだがないよ。」

とぼくがいいました。おね

12×12

えちゃんが、
「いいよ。おねえちゃんがえだをとってくる。」
といって、えだをとってきてくれました。
「どこにおこうか。」
とおねえちゃんがききました。ぼくは、とりがいつもくるデッキのレールのところに、きのはこをおきました。
ぼくのにわは、いろんな

いえのうえを、はやくとんでみたいです。
ぼくとおねえちゃんが、とりのすばこをつくったりゆうは、とりがすばこのなかで、どうやってすごすかをみたいからです。ぼくは、ふゆにとりたちがくるのをまっています。もしふゆにこなかったら、らいねんのはるにきてほしいです。そして、ぼくのすばこで、た

とりがきます。たとえば、ブルージェイ、きつつき、ロビン、すずめ、ゴールドフィンチ、ナゲキバトがきます。ぼくのいちばんすきなとりは、ブルージェイです。どうしてかというと、とぶのがはやいからです。いつもぼくのいえのデッキにきても、ぱっとみえなくなります。ぼくも、ブルージェイみたいに、いっかい

まごをうんで、おかちゃんをそだててほしいです。ぼくは、とりがたまごをうんだら、小さいカメラをつけて、がんばってかんさつしたいです。